

戦時下の土浦中学生 8 ～土浦中学の通年動員～

戦局がいよいよ不利となった1944(昭和19)年2月、「決戦非常措置要綱」が閣議決定され、これによって中等学校程度以上の学徒を「今後一年、常時之ヲ勤勞其ノ他非常勤務ニ出勤セシメ得ル」とし、ついに通年動員が実施されることになりました。文中の【 】内は筆者による注記です。

通年動員

1944年2月の「決戦非常措置要綱」に続き、政府は3月に「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒動員実施要綱」を決定し、動員の基準を明らかにしました。文部省は、この決定に基づいて詳細な学校別動員基準を作成し、3月末に各学校に通達しました。

土浦中学でも、通年動員の計画が具体的に進められ、6月18日には宗光太一郎校長の「通年動員に関する訓話」が行われました。4年生(中45回)の勤務先は第一海軍航空廠に決定したので、宗光校長は5年生(中44回)の動員先工場決定のための視察を始めました。26日には牛久の興亜精機製作所、28日には中津の東京電機製造株式会社【主として軍船舶用モーター製造】と中村航空兵器株式会社【機関銃の弾丸製造。1945年10月3日に社名を株式会社中村鉄工所に変更】を視察し、学校から近い東京電機と中村航空兵器を動員先に決定しました。また土浦国民学校高等科1・2年の男子生徒は第一海軍航空廠に、女子生徒は富士崎町の森島工場【鋳物製造】に動員となりました。

7月4日、5年生が両社を見学し、8日には4・5年生の動員壮行式が催されました。式終了後、4・5年生全員が真鍋の八坂神社に参拝して、5年甲・乙組は東京電機へ、丙・丁組は中村航空兵器へ、4年生全員は第一海軍航空廠へ向かいました。11日には航空廠で4年生の入所式が挙行され、学校からは校長と学年主任とが参列しました。

東京電機に動員となった5年生佐藤菊四郎(中44回)は、動員先での生活を『土浦市史』(昭和50年11月刊)に、「あの頃……思い出すままに」と題して、次

のように記しています。

「勝ちいくさのはずだった戦況が日増しに不利になって、昭和十九年私達が中学五年生になった年、いよいよ戦局の重大化によって、通年動員を命ぜられ、一学期末の七月、中高津の東京電機の工場で働くことになった。

そこでは電動発電機や工業用ミシンモーターを生産していた。私達十余名は旋盤部に配置された。その当時は班長と呼ぶ熟練工数名のもとに、各十何名かの工員や学徒がいて、数班に分かれていた。最初の日は、工員の作業を旋盤のわきに立って、みているだけでへとへとに疲れてしまい、立ち仕事のつらさが身にしみた。しかし次の日からは早速ハンドルを廻して、バイト【旋盤に用いる金属などを切削する工具】の動かし方を教わり、鋳物の荒挽【あらびき】等をはじめた。

最初のうちは、お手伝い的な感じであったが、私達に仕事の指導をしてくれた二、三年上の工員たちが次々と軍隊に入隊し、やがて数名の工員と私達中学生たちが、旋盤部の中心になってしまった。旋盤部は生産の隘路だとのこと、間もなく二時間残業がはじまり、十九年の秋ごろからは夜勤もはじまった。一週間交代だった。夜勤の週末になると顔色が悪くなるような気がした。しかし、夜勤では工場内の数坪の小さな釜屋で夜食が出た。イモ、大根、麦、うどん、ねぎ等を大きな釜でとろとろに煮た雑炊だった。うすい塩味だけのドンプリ一杯だけだった。箸を使わなくてもフーフー吹きながらすすめるようなものだったが、熱い雑炊がうまかった。しかし、少しおくられて行ったり、警報のサイレンで暗い『防空電球』も消されて、ちろちろ燃える残り火で食べる時には、人数だけあるはずのどんぶりが足りなくなったり

もした。

九月十八日には十七才以上兵役編入【法改正により、それまでは20歳だったものが、1943年に19歳へ、1944年に17歳へ、と切り下げられた。】ということになり、秋の一日『徴兵検査』と『点呼』を兼ねて今の土浦第一中学校【当時は土浦国民学校西校舎】に集められ、在郷軍人として命を預けた私達は、軍籍に入ったのである。当時私達も国防服を着、左の襟には体力検定章のマーク、右の胸ポケットの上にはカッターのような白布の小片に、又左の胸のポケットの上には血液型や、名前を書いた白布を縫いつけた。封筒に遺髪と爪を切って入れておけ、爆撃で吹っ飛んでもよいように、指先にも名前を書いておけ、と言われたのもそのころだった。

それでも十九年の夏には、裏の庭で工場の盆踊が催され、夕方仕事を終えた工員さん達が女工員さんの浴衣を借りたり、また化粧などして陽気に踊るのをちよつと羨しく思ったりした。

しかし、年が過ぎて昭和二十年になってからは、ほとんど連日昼夜空襲警報で、二月十六日には海上の機動部隊から発進した艦載機が、警報が鳴る前に上空に現われるしまつで、敵機を見ながら壕にかけこむこともあった。……(略)……「また同じく中44回の小倉昭一は、『思い出すままに』として、次の手記を認【した】めています。

「吾々に動員命令が下った時は、何とも複雑な気持だった。上級学校を目指して勉強中の吾々には、今後の不安と一方国家への忠誠心が入りみだれていた。いよいよクラス毎に半分は中村鉄工所へ、半分は東京電機へと配属されて、労働提供を強制されることになった。吾々東京電機組は、青春と学業を省み



中44回・卒業記念写真(『中44回卒業50周年同窓会』アルバムより)西の空を一晚中まっ赤に染めた東京大空襲のあった夜が明けた10日、動員先の工場での夜勤を終えた中44回生は学校に集まり、卒業式に臨んだ。宗光校長の訓示を聞き、決戦の覚悟を新たに「海ゆかば」を斉唱、射撃場でこの記念写真を撮って解散した。



中高津二丁目(現土浦四中前)にあった東京電機製造株式会社土浦工場。(昭和50年つくば市桜三丁目に移転した。)
(上、『むかしの写真・土浦』より)
昭和19年4月5日、国防服姿も凛々しく、工場に向かう東京都立第三商業学校(現東京都立第三商業高校)生(右)。『アサヒグラフ』昭和19年5月3日発行より)



る暇もなく、朝から夕方まで軍用の船舶用モーターの部品作りや、その組立てに精を出した。中学生ということで多少寛大な扱いが、なされたんだろが初めての経験なのできびしい毎日であった。油を使った仕事のため、今まできれいな皮膚をしていた両手も、すじだらけになり、その間に油の汚れがしみ込んで、全く労働者風の手に変った。中でも鋳物工場に配属された友達はいくら洗っても首すじまで黒くなり、何か全身が鋳物の粉で汚れたような色をしていった。しかし、仕事がいやだと思つたことはないから不思議である。私は生来汗かきのせいもあって、真夏など煮えたぎった油のそばで仕事をするので、タオル一本では間に合わない程、汗をかいたことを思い出す。工場には吾々同様動員された、昭和女学校の女生徒もいた。卒業のため工場を去るときは、やはり一抹の淋しさを覚えたが、今でも工場の傍を通ると昔を思い感無量である。」「(『土浦市史』より引用)

中村航空兵器に動員された横田尚義(中44回、本校第21代校長)は、「……零戦等の戦闘機の機銃の弾丸作りを行った。旋盤を使って弾丸をくりぬく仕事であった。そのうち夜勤も交代で行われるようになった。夜勤の時は夜の8時頃から翌朝の5時、6時頃まで徹夜で働いた。夜食が出たが、カボチャやジャガイモにご飯がついている程度であった。たまに、大けがをする者もあったが、不満の声は全く聞かれなかった。同年齢の土浦高女の生徒達も通年動員され、同じ工場内で働いていた。」と、当時の作業の厳しさを語っています。(『進修百年』より引用)

3年生(中46回・47回(注))は、はじめ中川ヒューム管、霞ヶ浦造船所等に勤労働員となりましたが、1945(昭和20)年1月30日からは通年動員となり、第一海軍航空廠に入廠しました。当初は横須賀海軍工廠の予定でしたが、遠隔の地での勤務を心配した宗光校長が軍や所轄官庁と交渉した結果、地元の第一海軍航空廠に変更になりました。うち1クラスは機械工場に配属になり、7月初め、その工場が福原(現笠間市)へ疎開したため、生徒たちも移動しました。

更に2年生(中48回・高1回)も通年動員となり、3月3日に壮行式が挙行され、7日から第一海軍航空廠や霞ヶ浦海軍航空隊で働くことになりました。航空隊では本物の飛行機の掩蔽工作や給油作業、更に偽装工作【本物に似せて木製のモデルを作り、滑走路付近に並べておき爆撃させる。】も行いました。しかし空襲の激化に伴う軍関係機関の分散化により、一部のクラス【甲組】が学校に戻され、教室で飛行機エンジンの分解組立を教わっています。

これを受けて、新築中であつた新講堂【旧体育館】を工場とすべく改築工事が6月26日から始まりましたが、終戦により中止となりました【終戦後、新講堂の新築工事は1946年5月に再開され、翌年11月に創立50周年記念式典に併せて落成式が挙行された。その半世紀後、100周年記念事業として進修記念館と学習館に建て替えられた】。

動員下の卒業式

1945(昭和20)年3月10日には動員中の5年生と4年生【繰り上げ卒業】の合同卒業式が挙行されました。卒業生たちは、動員先から登校し、卒業式に臨みました。中44回佐藤菊四郎は次のように記しています。

「あの三月九日は夜勤だった。一晩中警報が開放して、やがて【東京大空襲のために】西の空が夕やけのように、まっかに明るくなった。その赤い空に一段と明るく、輝く火の玉が、みるみる大きく、明るくなると、急にいくつかの火の玉に分かれて落ちていった。それがB29だったか、味方機であつたか判らない。しかし、そのころは迎えうつ戦闘機もほとんどなく、わずかに高射砲が応戦したようだった。

こうして仕事もできないまま夜があけた。三月十日は私達土浦中学四十四回生と、一年短縮で、四年制になった四五回生との合同卒業式だった。

油で汚れた手を粘土で洗い、学校に行き本土決戦を誓い、『海ゆかば』を歌って式を閉じたあと、射撃場で記念写真をとって解散した。」「(『土浦市史』より引用)

しかし、1944年12月に閣議決定された「新規中等学校卒業生ノ勤労働員継続ニ関スル措置要綱」によって、卒業生たち

は、中等学校に新たに設けられた付設課程に進学させられ、動員はそのまま継続となりました。また上級学校進学者や軍関係学校入学者に対しても、入学を3ヶ月間延期する措置が採られたので、彼らも6月23日及び27日に、東京電機・中村航空兵器・第一海軍航空廠での勤務を免除されるまで、工場勤務を続けました。6月14日には新2年生(中49回)の動員も決まり、18日、345名が第一海軍航空廠に入廠、7月9日からは新1年生【併設1回】も通年動員となり、援農作業に従事する一方、校庭の開墾も始まりました。

終戦、帰校

8月15日、登校した一部の生徒と職員は終戦を告げる玉音放送を拝聴、その後、宗光校長の訓話がありました。8月20日には2年生以上で第一海軍航空廠に出勤していた生徒の退廠式が行われ、翌21日に全校生徒が登校、中庭で集会が持たれました。動員中幸いにも本校生徒に死傷者は出ませんでした。全校生徒1405名(9月25日現在)は、敗戦による虚脱感に陥り、落ち着いた学園生活に戻るまでにはかなりの時間を要しました。

(注) 中46回・47回：いずれも1942年入学。1943年の「中学校規程」(中学校の修業年限を4年に短縮)により、1944年3月に4年修了して卒業した生徒が46回、1947年3月に5年で卒業した生徒が47回卒業となった。同窓会等は、合同で開催しているとのことである。
参考文献
「学制百年史・戦時教育体制の進行」
文部科学省

「進修百年」土浦一高
※次号から、中45回生の通年動員(第一海軍航空廠)について、掲載します。
(高21回 松井泰寿)